

令和元年度 富山県農政審議会の概要

1 日 時 令和元年5月28日（火） 10:00～11:30

2 場 所 富山県民会館611号室

3 出席者 委員12名、代理出席3名（委員数24名）

4 あいさつ（農林水産部長）

近年、産地間競争の激化や後継者不足、国際貿易交渉の進展による経済のグローバル化、国の米政策の大幅な見直しなど、農業を取り巻く環境は大きく変化している。農村では、地域コミュニティ機能の低下や荒廃農地の増加などが懸念される。こうした中、県では、将来にわたり発展する「競争力の高い農業」と「豊かで美しい農村」の実現に向け、昨年5月に本県農政の指針である「農業・農村振興計画」の見直しを行い、施策を推進している。本日は、「富山県農業・農村振興計画」の進捗状況や令和元年度の重点施策について報告させていただくので、忌憚のないご意見・ご提言をいただきたい。

5 議 事

(1) 「富山県農業・農村振興計画」の進捗状況の概要（平成30年度）

(2) 令和元年度の重点施策について

6 委員の主な意見

- ・ 農業後継者の不足とか不在といったことが大きな問題であると特に強く感じている。集落営農が頑張っていて、本当に足腰の強いような法人組織までつくりあげたといったようなところもあり、こういった動きを市内一円に波及させていけたらよい。
→ 県では、新規就農者の育成確保は喫緊の課題と捉えており、①就農相談や先進農家での中期体験、長期実践研修、就農時の機械や施設整備に対する支援、②国の農業次世代人材投資資金あるいは農の雇用事業、③とやま農業未来カレッジでの研修、④とやまで就農マッチングバスツアー、⑤今年度の新規事業である中山間産地等人材養成支援事業により、就農希望者に対して産地等が行う研修に必要な機械や施設の整備支援等を行っている。
- ・ 学校給食について、富山市及び高岡市において、市場機能を利用し、特に県内野菜の安定的な供給を連続して図るための新しいネットワークづくりができた。市場機能を十分に発揮して、今年はぜひ新しい成果を出していきたい。
→ 富山県は多彩な風土のもと、いろいろな食材がある強みがある。市場の担当者の方にコーディネーターになってもらい、市町村域を越えて学校給食への食材供給を図っており、今後は、一次加工や規格巾拡大等により、県産食材の活用拡大を進めたい。

- ・ 1 億円産地づくりについて、産地状況を踏まえて県産の魅力アピールするかが大事であり、市場も県産野菜のウエートを高めていきたい。
- ・ 1 億円産地づくりについて、中間目標である 2021 年の販売金額が 24 億円とあるが、どのような園芸を考えてこのような数字を挙げているのか。

→ 15 J A で 22 の戦略品目を定めている。この品目の中には、個別の J A だけではなく、広域的に伸ばそうとしている品目もあり、24 億円としている。
- ・ イノシシ被害については、農作物被害のほかに田んぼの畦の崩壊などの直接的な金額が出ない被害が多い。そうした被害の把握はどれだけ進んでいるのか。

→ 国から示されている被害額の集計の仕方では、法面や畦等の被害を集計するものにはなっていない。こうした農作物以外の被害の修復にあたっては、中山間地域の直接支払いの活用を促している。
- ・ C S F（豚コレラ）について、空港や新幹線の駅等での防疫体制を考えてもらいたい。また、C S F が発生した責任を生産者に押し付けるようなことはやめてもらいたい。

→ 県では、①飼養管理基準の遵守、②定期的な立入検査や消毒器材の整備、③情報提供や注意喚起、④死亡した野生イノシシのウイルス検査などを行っている。また、空港では、動物検疫所と協力してリーフレットの配布や注意喚起、消毒槽の設置を行っている。
- ・ 富富富の作付面積について、最終目標をどれだけに考えているのか。

→ 30 年デビューから令和 2 年までの 3 年間で当面の期間として、一定の面積の中で、栽培面の課題等があればブラッシュアップ、技術の改善を図りながら市場評価等を踏まえ、令和 3 年以降の中長期的な販売戦略を構築していきたいと考えている。
- ・ 高齢化や子どもが田んぼを引き継がないため、田んぼを購入してもらえないかという話が最近多くなってきている。買ってあげたい気持ちはあるが、この先、田んぼを購入してまでやっていけるのかということもあり、県で何か考えてもらえないか。

→ 購入については、市町村の農業委員会に一度ご相談いただきたい。また、貸し借りについては、農地中間管理機構という仕組みもあるので、合わせて相談いただきたい。
- ・ 基盤整備について、用水路の老朽化や圃場の大区画化の要望が非常に多い。中山間地でも平場でも、スマート農業が取り組めるような基盤整備も合わせて考えてもらいたい。

→ 地域のニーズに応じた基盤整備を鋭意進めてまいりたい。また、中山間地域でのスマート農業について、水管理の省力化ということが非常に重要な視点になっている。昨年度来、中山間地域も含めて、I C T で自動給水栓等を設置して省力化の実証試験等を進めている。

(会長まとめ)

- ・生産力を高める、あるいは競争力を高めるという方向はかなりはっきり出てきた。もうひとつの活力ある農山村をつくるということは、これから本当にやっていかなければいけない、
- ・農家がどうというより、農村の世帯そのものが危なくなっているというか続かなくなっている。農村、集落そのものが続かなくなってくる懸念があり、中山間はもちろん、平地でもしっかりした対応を今のうちからしておかなければいけない。
- ・集落営農は、担い手という意味もあるが、例えば農地資源あるいは村を守る、そういうような機能を一緒に持たせてきた経緯がある。これからは、形は変わるかもしれないが、その考え方をむしろ深める、延長していくような方向を考えなければいけない。
- ・地域資源を守るための担い手像をどう考えておくのか。大規模な経営だけに任せ切れないところは出てくる。中山間の担い手像をもっとはっきり出しておく必要がある。
- ・最近、小農の復権が言われるが、その小農というか家族経営がどんどんなくなっているのが富山県である。家族経営がなくなるというのは、どういうことをあらわしているのかということも含めて、担い手像をしっかり描いていかないと富山県の農業農村は守っていけない。